様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 ２４ 日現在

機関番号：３４４５３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ００４５３

研究課題名（和文）公共図書館における知的障害者への合理的配慮のあり方に関する研究

研究課題名（英文）Reasonable Accommodations for Persons with Intellectual Disabilities by Public Libraries

研究代表者
藤澤　和子（Fujisawa, Kazuko）

大和大学・保健医療学部・教授

研究者番号：３０７３９４２０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、公共図書館で実施するべき知的障害者への合理的配慮の具体的内容と方法を明らかにすることである。知的障害者と家族を対象に公共図書館利用の実態とニーズについて調査した結果等をもとに、わかりやすい環境的配慮、わかりやすい資料、職員の対応とサービスの3事項について10種類の取り組みを、4館の公共図書館で実施し検証した。これらの実践を通して、知的障害者の図書館利用と読書支援を推進する合理的配慮のモデルケースを示した。合理的配慮を進めるためには、知的障害者のニーズを尊重し、図書館職員と施設や事業所職員が協力し合い、当事者と直接コミュニケーションをもって取り組むことの必要性を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の学術的意義は、知的障害者の図書館利用の実態とニーズを当事者と家族を対象とした全国規模の調査によって明らかにし、知的障害者に対応した合理的配慮のある障害者サービスの具体的な内容と方法のモデルを示したことである。これにより、知的障害者が公共図書館を平等に利用して読書する意義と方策について、公共図書館をはじめ、障害者事業所や家族支援者等に広く示した社会的意義があったと考える。

研究成果の概要（英文）：To clarify the reasonable accommodations for persons with intellectual disabilities by public libraries, the author examined the current status of public library use and related needs among such persons and their families. Based on the results, appropriate approaches were considered. Three public libraries adopted 10 approaches to address 4 areas: understandable environmental considerations, understandable brochures, and library staffs' attitudes and services. These approaches served as model cases to promote library use among persons with intellectual disabilities and reading support for them, revealing the necessity of respecting their needs and directly communicating with them through cooperation between library staff and facility/office employees when making reasonable accommodations for them.

研究分野：リハビリテーション科学、特別支援教育関連

キーワード：公共図書館　知的障害者　合理的配慮　障害者サービス

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

平成 28 年 4 月から障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律（障害者差別解消法）が施行され、図書館を含む行政機関等において障害者への合理的配慮の提供が義務化される。そうした状況のもとで、知的障害者が読める所蔵資料や読むためのサービスの提供の乏しさと障害者サービスの利用実態の低さは（国立国会図書館、2010）、公共図書館の喫緊の課題として捉えていく必要がある。このような実態を招いた要因として、知的障害者へどのようなサービスや対応をすればいいのかがわからないという問題があると考える。知的障害の障害特性によって、当事者からのニーズの発信が弱く、図書館の側に届かなかったという問題や、一般的な話しかけや関わりが理解できない知的障害者への対応の難しさがある。多くの知的障害者が公共図書館を有意義に利用できるためには、図書館を利用しにくくさせている要因と彼らが図書館に何を求めているのかというニーズを把握し、彼らへの適切な合理的配慮が提供されなければならない。

２．研究の目的

知的障害者が公共図書館をどのように利用し、どのようなニーズをもっているのかを明らかにして、図書館利用や読書支援を進めるために彼らに提供するべき合理的配慮の内容と提供方法を検討する。そして、公共図書館での実践を通して検証し、知的障害者に対して公共図書館が行うべき合理的配慮について提案する。

３．研究の方法

平成 28 年度より 3 カ年を研究期間とし､研究目的を達成するために 4 段階を設定して研究を進める。

第 1 段階（平成 28 年度）

合理的配慮を行うに当たり、知的障害者の図書館や図書へのニーズを明らかにするために、知的障害者の公共図書館利用の実態とニーズ調査を当事者と家族に実施する。その結果により取り組むべき合理的配慮の内容を検討する。

対象者：当事者団体である全国手をつなぐ育成会連合会の会員である知的障害者とその家族（支援者を含む）で、調査協力の意思が確認できた人を対象とする。

調査方法：わかりやすく書かれた選択回答形式を中心とし、一部自由記述形式を併用した質問紙調査を実施する。育成会連合会の全国にある支部 55 か所を通して、1100 通を配布し、知的障害者本人、あるいは家族が本人に聞きとりをして、質問紙に記入し、郵送による返答を求める。

第 2 段階（平成 29 年度前期）

知的障害者の図書館サービスについて海外の動向を調査し、参考事例を収集する。主にスウェーデンの公共図書館において実施されている障害者サービスと LL ブックの制作及び図書館での LL ブックの普及状況を視察する。

第 3 段階（平成 29 年度後期～30 年度前期）

当事者への調査結果と海外視察を総合的に分析し、取り組むべき合理的配慮を次の３項目として、4 館の協力図書館で 10 種類の取り組みを実施する。

①LL ブックや視聴覚メディア資料などの提供

知的障害者が読書を楽しみ情報を得ることができる資料を揃え、LL ブックコーナーの設置やマルチメディア DAISY の体験と貸出を実施し、効果を検証する。

②図書館利用のためのわかりやすい環境的配慮と情報提供

障害特性に応じた表示や設備、理解と啓発のためのポスターやわかりやすい利用案内について検討し実施する。

③職員によるわかりやすい対応と読書を届けるための支援

体験ツアーやアウトリーチ等の彼らが必要とする人的援助の取り組みを実施する。

さらに､知的障害者の読書支援を行なうことができる人を養成するための読書サポート講座、知的障害者の図書館雇用についても実施する。

第 4 段階（平成 30 年後期）

研究全体のまとめとして、公共図書館で実施すべき知的障害者への合理的配慮の内容と方法を提案する。一般公開のシンポジウムや冊子等の形で成果を積極的に発信し還元する。

４．研究成果

研究成果と成果の公開について報告する。

(1) 知的障害者と家族への調査結果

1100 通の内、616 件(有効回答 604 件)の回答があり、回収率は 56.0%であった。

①公共図書館利用実態とニーズについて

公共図書館の利用経験がある人は 428 人（71%）、ない人は 176 人(29%)であった。「本や雑誌を読む」が 307 件（38%）と最も多く、「DVD や CD を見る聞く」と「新聞を読む」を合わせた資料の閲覧に関する回答が 452 件と 57%を占めた。一方、読み聞かせやお話し会、代読（対面朗読）等の「障害者サービス」に該当することについての利用経験は少なく、一般の利用者と同様に資料の閲覧に利用する人が多いことがわかった。

公共図書館へのニーズについての回答人数は 352 人（58%）、回答件数は 851 件であった。困った時や利用を手伝ってほしい等の人の支援へのニーズが 266 件（31%）、わかりやすい資料へのニーズが 249 件（29%）、読みたい本を探すのを手伝ってほしいが 139 件（16%）、アウトリーチや代読や読み聞かせへの要求が 113 件（13%）等であった。知的障害者がわかりやすく読みたい資料を集めて配架し、本を探す、借りる、返す、読む、聞く、相談することができるように人的な支援をする必要性が高いと考えられた。

②当事者が求める本について

知的障害者は、本に関心の薄い人が多いと思われがちであるが、好きな本についての有効回答人数は 399 名（66%）、回答件数は 544 件であった。また、「好きな本」の質問にジャンル別の 32 種類、「こんな本がほしい」の質問に 57 種類の回答があった。これらの結果から、様々なジャンルの本に好みをもつ人が、調査対象者の半数以上あり、彼らが決して本への関心が薄いわけではないことが示唆された。

「こんな本がほしい」の回答のうち本の表現形態へのニーズを分類すると「文字の表記方法」「生活年齢に合う興味や情報提供のある本」「絵、写真の使用」「わかりやすい文や本」「聴覚、触覚の使用」「装丁」となり、LL ブックの特徴そのものを表していた。彼らは、このような条件を満たすさまざまなジャンルの LL ブックを必要としていることが示唆された。

（２）スウェーデンの先進事例の収集

スウェーデンの公共図書館が実施してきた知的障害者への障害者サービスで長年にわたり実施されてきた「LL ブックコーナー」「DAISY 図書等のｱｸｾｼﾞﾌﾞﾙな図書の提供」「朗読代理人の活動支援」「個室の設置」について見学し、有効性を確認した。

2013 年の新図書館法改定後に実施された「読書との出会い」（Pia Andersson Wredlert,2016）と呼ばれる図書館の活動の中心人物から報告を受けた。ストックホルム市の 5 館が機能障害者の読書を支援するために関係機関や専門職と連携をとって進めたプロジェクトである。朗読、本を劇にして演じる等の取り組みが行なわれ、当事者や関係者から好評価を得た。身近なアクティブな場として図書館が機能障害者に利用されていく道筋を示した。

（３）公共図書館で実践、検証した合理的配慮の 3 項目についての 10 種類の取り組み

①わかりやすい図書や視聴覚メディア資料の提供について

知的障害者が公共図書館を利用する主な目的は資料の閲覧と借りることであるが、読みたい資料がない、本が難しかったということで困っている人が多いという実態があった。そこで、LL ブックを多く所蔵し、他にもわかりやすい本を加えて LL ブックコーナーを設置することと、マルチメディア DAISY の視聴や貸出の機会を設ける取り組みを実施した。貸出件数等の調査により、コーナーの設置は、LL ブックとマルチメディア DAISY の貸出数の増加に影響することを明らかにした。LL ブックの冊数を増やしてコーナーに入れること、目立つ場所にコーナーを設置し障害や LL ブックに関する展示を並行して行なうことなどが、利用者に LL ブックとマルチメディア DAISY を知らせることに繋がると考えられた。引き続き、当事者のコーナー利用を増やすために、障害者関連の事業所や福祉課、特別支援学校等を通じてコーナーの広報を進めていくことが必要である。

②知的障害者が利用しやすい図書館の環境的配慮とわかりやすい情報提供について

障害特性による落ち着きのなさや声を出す等の行為のある人が安定するための場所、同行者が当事者に読み聞かせや代読をしたり、マルチメディア DAISY を視聴することができる場所として個室を設置した。理解・啓発のためのポスターは、知的障害者をはじめ、さまざまな人が図書館を気持ちよく楽しく利用することができるように、利用するすべての人々に理解をうながす目的で制作し、館内に掲示、WEB で公開した。図書館のわかりやすい利用案内は、図書館でできることやルール等の理解を促すために、近畿視覚障害者情報サービス研究協議会が提供する「ようこそ図書館へ」のひな型を利用して制作し、配布、WEB で公開を行なっている。公共図書館の標準的な分類法である日本十進分類法を知的障害者にわかりやすく表現することを目指してピクトグラムで標示する NDC ピクトグラムを制作した。今後、さらにこれらの取り組みを地域の事業所や特別支援学校等に広報して、利用の増加を目指していくことが課題である。

③職員によるわかりやすい対応と読書を届けるための支援について

知的障害者は、図書館員の直接的な対応による支援を必要としている。また、図書館へ行きたいけれど行けない人、図書館を知らない、何をしているところかわからない人もいる。そこで、図書館へ当事者を招いて自由閲覧や読み聞かせなどを体験していただく体験ツアー、事業所を訪問して本を届けるアウトリーチの取り組みを行なった。体験ツアーは図書館職員が事業所と事前に細やかな打ち合わせを行ない、参加者の障害の種類や程度、年齢、人数等に合わせてプログラムを準備して実施した。その結果、当事者や事業所の職員から、楽しかった、またお願いしたいという高評価を得ることができた。アウトリーチにおいても、本の紹介や資料の視聴の機会を積極的に設けることで、読書や資料への興味を高めた。また、知的障害者を図書館職員として雇用した取り組みも報告した。

さらに、知的障害者の読書支援を行なうことができる人を養成する目的で読書サポート講座を、大阪府（北部と南部）、奈良県、東京都の 4 カ所で開催した。基礎的な知識を提供する基礎

編と、知的障害者の読書支援を実際に行うための方法と技能を学習する実習付き実践編を 6 講座で構成した。参加者は図書館員や一般市民を対象とし、開催にむけた広報や運営は、協力図書館が担当した。アンケート結果によると、参加者は知的障害者の読書支援への関心をもち、そのための対応や方法について学びたいという目的意識の明確な人たちが多かった。内容をさらに深めたい、講座が増えれば良いなどの積極的な要望が挙げられ、講座開催の意義を認める意見が大半を占めた。

以上、3 項目の 10 種類におよぶ合理的配慮の実践を通して、具体的で現実的な合理的配慮の内容と方法の例を提示し、これから取り組もうとする他の図書館のモデルケースを示すことができたと考える。

今後の課題としては、取り組まれた実践が協力図書館によって継続され、実践する館が全国に拡大していくこと、全国的な事例や情報を共有し、さらに当事者の意見を聞きながら、より有効なサービスを模索し実施していくことである。そのために、学会や研究会等を通して実践的な研究発表を行ない、読書サポート講座を継続して代読ボランティアの養成等を実施していきたいと考える。

（4）研究成果の公開

障害理解と啓発のためのポスター、LL コーナーと体験ツアーの様子や効果を描いたマンガの成果物を、研究協力図書館と大阪手をつなぐ育成会の HP より WEB で公開し一般提供した。さらに NDC ピクトグラムはパンフとして学会発表時等に広く配布した。

平成 31 年 1 月 27 日（日）には、大阪市立中央図書館で公開の成果報告会を開催し、研究成果報告書（160 ページ）を当日の参加者約 120 名に配布した。また国立国会図書館等にも寄贈した。

＜引用文献＞

①国立国会図書館、公共図書館における障害者サービスに関する調査研究、シード・プランニング、2011 年
②Pia Andersson Wredlert“Möten med läsning―när bibliotekens verksambet når fler”Regionbibliotek Stockholm ,2016 年

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 3 件）

①藤澤和子、知的障害者の読書支援のために求められる本―当事者への調査を通して、図書館界、査読有、Vol.70、No.2、2018、pp.448-456
②藤澤和子、公共図書館で実施した知的障害者支援のための読書サポート講座、みんなの図書館 No.496、2018、pp.36-41
③藤澤和子、公共図書館における知的障害のある利用者への合理的配慮、図書館界、Vol.68、No.2、2016、pp.74-83

〔学会発表〕（計 11 件）

①藤澤和子・野口武悟・岩本高幸・浅井育子・澤井千聡、公共図書館でできる知的障害者への合理的配慮―３館の公共図書館で取り組んだ実践事例報告、第 20 回図書館総合展フォーラム、2018
②藤澤和子・野口武悟・岩本高幸・小尾隆一・山内薫・吉田くすほみ、公共図書館における知的障害者支援のための読書サポート講座の実践、日本特殊教育学会第 56 回大会自主シンポジウム、2018
③藤澤和子・野口武悟、公共図書館における知的障害者支援のための読書サポート講座の評価と展望―参加者へのアンケート調査からの考察、日本特殊教育学会第 56 回大会、2018
④藤澤和子・野村美佐子・打浪 文子・澤井 千聡・山内薫、知的障害者の読書支援のための公共図書館における合理的配慮－日本と海外の事例からの検証、日本発達障害学会第 53 回研究大会自主シンポジウム、2018
⑤藤澤和子・岩本高幸、すべての人に資料を届けるために～知的障害者と図書館、第 19 回図書館総合展、2017
⑥藤澤和子・野村美佐子・野口武悟・大塚栄一・浅井育子、LL ブックや LL 版利用案内を中心とした知的障害者への図書館サービス、第 103 回全国図書館大会第 10 分科会障害者サービス(2)、2017
⑦吉田くすほみ・藤澤和子、知的障害者へ本を届けるための代読について、第 43 回日本コミュニケーション障害学会学術講演会、2017
⑧藤澤和子、知的障害者の読書に関する調査、第 43 回日本コミュニケーション障害学会学術講演会、2017
⑨藤澤和子・野口武悟、知的障害者を対象とした公共図書館の利用実態とニーズ調査、2017 年度日本図書館情報学会春季研究集会、2017
⑩野口武悟・藤澤和子、日本における LL ブック出版の現状と展望、日本出版学会 2016 年度秋

季研究発表会、2016
⑪藤澤和子・都留泰作、知的障害者のための LL マンガの研究―難易度の異なる 2 タイプの LL マンガの調査、第 42 回日本コミュニケーション障害学会学術講演会、2016

〔図書〕（計 4 件）
①吉村和真、藤澤和子、都留泰作、樹村房、障害のある人たちに向けた LL マンガへの招待―はたしてマンガはわかりやすいのか、2018、180（5-12、34-41、48-51、63-68、72-85 分担）
②藤澤和子（文・監修）、寺尾三郎（訳）、埼玉福祉会、美しくなりたいあなたへ、2018、105
③藤澤和子、川﨑千加、多賀谷津也子、樹村房、はつ恋、2017、90
④高田栄一、藤澤和子、内田博幸、松永朗他 5 名、文理閣、手話・言語・コミュニケーション NO.5、2017、153（71-100 分担）

６．研究組織
(1)研究連携者
氏名：野口　武悟
ローマ字氏名：　(NOGUCHI Takenori)
所属研究機関名：専修大学
部局名：文学部
職名：教授
研究者番号（8 桁）：80439520

(2)研究協力者
打浪　文子（UCHINAMI　Ayako）淑徳大学短期大学部准教授
小尾　隆一（KOBI Ryuichi）社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会常務理事
野村　美佐子（NOMURA　Misako）日本障害者リハビリテーション協会参与
山内　薫（YAMAUCHI Kaoru）元墨田区立ひきふね図書館司書
吉田　くすほみ（YOSHIDA　Kusuhomi）大阪特別支援教育振興会
研究協力館
吹田市立図書館、河内長野市立図書館、桜井市立図書館、調布市立図書館